

# 糸を紡ぐ人

ニヤット・リン

訳 川口健一

トウ娘は、ホン・ラック県スアン・ギ村に住むいなか娘で、蚕を飼い糸をとる仕事をしていた。家は貧しく、両親はすでに老い、彼女が働いてふたりを養っていた。彼女はとても器量よしで、ほどほどに痩せていて、目はおだやかできれいで、陽が照り風の寒い日はいつも庭に出て、きれいな手で、黄色い糸玉をつくり、絹を織り、村人の衣服をつくった。ある日、庭で糸を紡いでいると、ひとりの儒学生が通りかかり、彼女の美しさにすっかり心が奪われ、日ごと二回高い丘を上り下りして、彼女と顔を合わせ、ほぼ一年が経った。後に、彼女は思い知って胸を打たれ、好意を抱いた。冬には丘の上は強い風が吹き、きびしい寒さの日が何日もあったが、彼女は耐え、庭で糸車を回し、書生に顔を見せた。

縁談がすすみ、ふたりが結ばれた時、彼女は十六歳に

なったところであった。夫の家は貧しく、彼女は以前の仕事を続け、夫の学問を支え、翌年に秀才に合格した。ふたりは睦まじく心を寄せ、二年余りが過ぎたが、まだ子はなかった。ある日、夫は妻を呼び寄せ、涙を流して言い聞かせた。

— このたび出かけるが、いつもどるか知れない、私自身もどることを当てにしてもいないし、また顔を合わせる事ができるやら？

彼女は言った。

— わかりました、家のことは代わって私があります、安心してお出かけなさって。お泣きになることはありません。

— 科挙で地方試験（郷試）の合格者の学位。郷試規定途中段階までの合格者の学位であり、最終段階における合格者の学位ではない。郷試最終段階合格者の学位は、举人。

国の才ある男子が、このいなか娘のようであつてはなりませんのでは？

だが、彼女もそう言った後でもらい泣きました。その青年はハノイに行き、それから行方知れずになり、人は文紳<sup>二</sup>たちについて行つたのだと噂した。何ヶ月か過ぎて、秘密警察がやつて来て、その青年の母親である本家の老婦人とトゥ娘を捕まえ、尋問しに連れて行こうとした。やつて来ると、すぐにトゥ娘はわかり、顔はすっかり青ざめたが、取り直して言った。

—ご安心ください、母と私は参ります。私たちには逃げなければならぬことは何もありませんし、手かせ足かせの必要などありません。

その男たちは、いなか娘がしっかりといて気丈な口ぶりなので、ふたりを縛ることをしなかつた。

夫はコンロン<sup>三</sup>に終身流刑になつたのであつた。彼女は母フ

二 ベトナム旧社会において地位・名声を得た儒学知識人をさす。フランス植民地期、反仏勤王運動の中心勢力となつた。

三 ベトナム語では Con Lon。ベトナム南部南シナ海沖合にある島。政治犯を収容した。今日 Con Son (コンソン)、また Con Dao (コンダオ)とも呼ばれる。

アン夫人<sup>四</sup>を連れていなかにもどり、糸紡ぎと機織りを続け、金を稼いで夫に代わり養つた。こうして四年が過ぎた。

夫の母から親族までみなが、彼女に再婚することを許したが、彼女は誰とも結婚しようとはせず、元の人との誓いの言葉をかたくなに守つた。コンロンの夫も何度か手紙を寄せ、彼女に別の人との結婚を勧めたが、その言葉遣いは悲痛哀切であつた。彼女は手紙を見て、ただ泣き、そして夫を思うと、高い丘の頂上はるかに登つて眺めたり、また実家にもどり庭で糸を紡いでは何年か前の書生との出会いを思い浮かべたりした。それらの時々、彼女はいつそう美しくなり、誰もが哀れ慈しみ、村では多くの人が別の男性を見つけようとした。夫の知り合いで、長いこと男やもめであつたある教師がひそかに彼女に思いを寄せ、仲人を介して縁結びにやつた。仲人が来た時、彼女はすぐにわかり、嘆いて言った。

—あの先生がそんなことと誰が思いますか！

そう言うと、仲人を叱つて追い出した。誰もが怒り、誰もが以前にも増して彼女をいとおしく思った。

四 ベトナム語では bà Hân。Hân は女性の名ではなく、ここでは明示されていないが、青年の父親の名である。

母ファン夫人が亡くなり、彼女は丁重に弔いをした後、町に行き、夫の許に行く許可を求めた。長いこと求め続け、ようやく許可があり、国はさらに旅費まで与えた。

彼女は故郷にもどり、片付けをして、そして一人異郷の地へと向かった。彼女はその地で三年、夫と苦勞を共にし、男の子を産むと、夫は妻に帰るよう告げた。

— 私は一人逆境に甘んじたが、妻と子には何の罪もない。今や世継ぎの子を授かった、おまえは子を連れて、くりに帰り、氣骨のある人間にしっかり育てるように。いつまでもここに一緒にいたなら、ふたつの人生を無駄にするだけだ。私は、…命を永らえるつもりはない、もう私のことは考えなくてくれ！

そう言うと、妻の手を握って、泣き、別れを告げた。

彼女が子を連れてもどつてくるという知らせを耳にした日、スアン・ギ村の誰もが誘い合つて、歓迎のやかたにやつて来た。彼女が子を抱いて車から降りる時、うつろな目が村人たちに注がれると、彼女は神秘的な姿に見えた。彼女は心打たれたかのように涙を流し、村人も多くの人がもらい泣きした。

彼女はみなが大切にしてくれるので、心地よく生活し、

丘のふもとに小さな家を構え、毎日布地の商売に出かけた。ある日、彼女が子どもと遊んでいると、夫が命を絶つて一ヶ月余りになるといふ知らせの書状が届いた。彼女は子を胸に抱いて倒れ、氣を失った。何日かして、別れを告げる夫からの手紙を手にした。

彼女は次第に忘却した。おそらく、彼女はわが身に子があるから十分であり、一方が生き、他方が死んだが、生きても死んだと同じことで、死んだ方がましなのであり、そうすれば靈魂が妻にもどり子にもどることができると思った。

翌年、夫と共に終身流刑にあつた人たちが釈放された。彼女もその知らせを知つたが、それでせつなくうらやむのか？ 彼女の子はいつの間にか病に罹り、亡くなり、彼女はそれ以来、精神の病を発した。今ではぶらぶらと歩き回り、歌を歌い、だがよく彼女は生まれた家にもどつては糸を紡ぎ、一日中紡いでも疲れを知らず、しばしば何句か歌を歌つた。

初めから憐れであつたが、よく考えて見ると、彼女にはよかつたし、多分、それで済むのであり、實際彼女は人生で最も幸せな人なのであり、私たちは彼女のようにはな

らず、一生苦しい思いをしなければならぬのである。

そう、思うに、生きて生涯苦しみを背負い、苦しみは決して和らぐことなく、自ら身を滅ぼしてようやく離れるというやり方しかなく、狂気はあまり求めるべきではないというのであろうか？彼女は自分が苦しんでいることを知らなかったのであり、彼女は天界の人であつたのだ。ああ！だが今やトゥ娘はこの上何を知っているのか、彼女はわが夫や子を思い浮かべることがあろうか、かつて誰が彼女を愛したのか、彼女は思い浮かべて、さらに誰を愛するのか、彼女はただ日々ひとり何かを夢見、高い丘のはるかかな頂上に登っては眺める……。しかし、彼女は今誰を見つめるのか？俗塵の道半ばにして、糸車はすでに昔の回転を止めていた。

一九二七

(了)

## 【解説】

「糸を紡ぐ人」は、ニヤット・リン（一九〇六一—一九六三）初期の短編集『糸を紡ぐ人』（一九二七年）の表題作である。この短編集には表題作を初め、全十一編の短編が収録されている。ニヤット・リンは一九〇六年の生まれであるから、この短編集が世に出たのは、彼が二一歳の時ということになる。ニヤット・リンが作家として活躍するのは、一九三三年に結成される文学グループ「自力文団」においてである。ニヤット・リンはこの短編集を出す以前の十代のころから作品を書いていたようであるが、出版はされていない。

彼は、一九二七年から一九三〇年までフランスに留学するが、留学時点でこの短編集はすでに世に出ていると考えられる。なお、彼は留学以前に、インドシナ美術学校でも学んでいる。この美術学校は、フランスの画家ヴィクトル・タルディューによって一九二五年にハノイに創設された。

短編「糸を紡ぐ人」は習作であり、未熟な点が見られる。例えば、青年と糸を紡ぐ娘それぞれに関わる人々（主に両親）の扱いに無頓着な点。また、この物語は、暗示

と飛躍に支えられているが、この手法が必ずしもうまく機能していない点、など。しかし、この短編はその後のニヤット・リンの創作を考える上で、見逃すことのできない作品であると訳者は考える。それは、この短編における青年の人物像に関係する。青年は科挙試験の秀才に及第するが、立身出世を望んではいない。反仏の勤王運動に加わり、流刑になったことが暗示的に語られる。この人物像は、ニヤット・リンの後の作品、例えば「かくてある日の午後」（機関紙「風化」九一号一九三四年三月三〇日・九二号同年四月六日）に登場する権力に追われ逃げる青年や、代表作『断絶』（一九三五年）における封建的な旧社会から抜け出て孤独な行動をする青年などにつながるように思う。因みに、これら二作品に登場する青年の名はどちらもズン（Dung）である。

短編集『糸を紡ぐ人』収録の全十一編は、それぞれ内容・テーマが異なるが、一編だけ登場人物が、「糸を紡ぐ人」のなかの女性トゥ娘と重なる短編がある。それは「トゥ・ラムの夢」という短編である。

この短編には、同学のふたりの青年が登場する。法律学校を出て役人になり、現実のぱっとしない人生を送

る「私」と両親が亡くなったため法律学校を中退し、文明にとらわれない理想的な生き方を求めようとする学友（名はチャン・リュウ）のふたりである。理想に生きる青年は心の安らぎを求め、各地を歩き回る。そして、山間の小さなトゥ・ラム（Tu Lam）という村で、以前世話になった家の人に偶然出会う。その家族は転居してこの地に来たのである。その家には昔、かわいい少女がいたが、今や美しい娘になって、糸を紡いでいた。その娘が、「糸を紡ぐ人」のトゥ娘（Tu Nuong）と同じ名なのである。青年と娘は結ばれ、青年はその後もさらに理想の人生を夢に描く。一方、役人の「私」は代わり映えのない現実の生活を続ける。

「トゥ・ラムの夢」は現実と理想をテーマとしたこのような物語である。

この時期のニヤット・リンの作品に『儒風』（一九二六年）という長編小説がある。物語の末尾には、執筆期間が一九二四―一九二五年と記されている。

この長編は、科挙試験をめざす書生とその青年を忍耐強く支える年若い妻の物語である。青年は、科挙になかなか合格することができず、苦労を重ねる。妻は子育て

のかたわら、商売をして家を支える。ついに、青年が科挙首位合格の榮譽を得るところで物語が終わる。

実は、この小説にも「糸を紡ぐ人」との登場人物の重なりが見られる。『儒風』の主人公青年を支える妻の実母は bà Huân であるが、「糸を紡ぐ人」の青年の母（トゥ娘の義理の母）も bà Huân である。（注にも書いたが、Huân は男性の名であるから、bà Huân は「ファン夫人」の意で、夫の名がファンである）

『儒風』は味わい深い物語ではあるが、筋の展開にあまり起伏がない。そのためか、ほぼ同時期の小説『ト・タム』（ホアン・ゴック・ファイック作、一九二五年）のような熱烈な読者を得ることはなかったようである。しかし、まぎれもなく、『儒風』はベトナム近代文学黎明期の重要な作品のひとつである。

テキスト：

Nhật Linh, “NGƯỜI QUAY TO”,  
đời nay, Sài Gòn, 1962 年版